

# 統一

第貳百拾貳號

海外の發展

海軍大佐 佐藤鑑太郎

日蓮主義綱要

大僧正 本多日生

佐渡に於ける日蓮上人

文學士 小林一郎

拆伏餘論。活動史

大明治三十九年二月二十四日第三種郵便物認可(毎月一回)

(東京 三島印刷株式會社印刷)

日蓮上人云く

當世日本國子細可有之由存之定如勘文候べきか。設日蓮死生雖爲不定妙法蓮華經五字流布無疑者歟。乃至故天台大師指日蓮云後五百歲遠沾妙道等云云。傳教大師戀當世云末法太有近等云云。幸哉我身當數數見擇出之文。悅哉。悅哉。

(富木殿文九七九頁)

## 日蓮主義綱要

(承前)

大僧正本多日生

先刻より佐藤大佐の御熱誠なる御講演を拜聴して大に感動致しましたが、それは今日陛下御大患の場合に際しまして、維摩經の「衆生病むが故に我亦病む」の文と、法華經の本心を失へる子が父背喪せりと聞いて心遂に醒悟するの文とを擧げて、此の際國民は各々懼戒慎して、健全なる精神に歸り、各自の本分を發揮すべき事を諄々として述べられましたが、恰も生ける日蓮上人より御教訓を聽くが如くに思はれ非常に感動いたしました。

日蓮上人は五逆の罪は雀亂の如く誇法の罪は白癩の如しと仰せられましたが、五逆は形の上に現はれる罪悪なれば、何人にもその罪惡たることが了知せられて之を恐れざるものはない、丁度雀亂即ちコレラ病の如きは誰れにも知れて用心するに至るが、誇法の罪は無形の精神界に起るのであるから、表面からは見分けが

現代の時弊に就ては已に表面に發現せる害毒も少なくてはありませんが、而かも之に就て根本的救治の方案

を立つるには、無論精神界の方面より手を下すが第一の急務なりとせねばならぬ、この思想上に對して堂々たる意氣信仰を作興し來るは、最急最要の大事であらうと信じます、この事たるや、尋常一樣の事ではその目的を達することは出來ぬ、この滔々として汎濫せる渦流を防止して各々その處を得せしむるには、夏禹の水を治めしかやう、三たび門を過ぎるも入らすの熱誠と、天下の廣居に居て天下の大道を行ふとの抱負と、その外の大難は風前の塵なるべしとの覺悟を以て勇往邁進せねばならぬ、

この汎濫散漫なる思想界に對し確乎不拔の歸趣統一を與へんとするには、到底二宮主義や、片々たる偉人崇拜の感化によりて、終局の目的を達し得べきものでない、之を古今に徹して謬らず、之を萬人に與へて悖らざる天下の大道を提げて立たねばならぬ。

然るに日蓮主義は如何なるものかと云へば、眞に天下の廣居に居て天下の大道を行ふものであつて、正合堂々、攻むべきは攻め正すべきは正し、私すべきは私

し合すべきは合して、折伏の元氣横溢すると同時に包容の度量を有し、而かも窮極の統一歸趣を標榜し、萬人に與へて悖らず、古今に通じて謬らざる充全圓滿の大主義である。

さてこの日蓮主義の中心生命をなせるものは何なりやと云ふに、即ち宗旨の三秘と稱するものは是なり、三秘は教義の結束點であり又信仰の依止處である、上人が『法華經の餘經に勝ぐれて目出度は三大秘法を含ませ給ふ御經なればなり』と仰せられしは、この大事を明言せられたのである、

この三大秘法は前回に講述せし五箇の綱格によりて探擇せられたので、教としては一切經中最第一の法華經書量品に依り、機は大法の直機たる當今の人類に對し、時は正しく大法廣布の當時に應じ、國は八萬の國にも超へたる大日本國に於て、序は外小權迹を去つて法華本門の大教即ち開顯統一の大教義を宣揚し、こゝにその歸着を三大秘法に結束し給ふたのである。

### 名稱】三大秘法とは左の如し

#### 一、本門の本尊

#### 二、本門の戒壇

#### 三、本門の題目

この三秘は單なる形式にあらず尤も深意を包含して居るのである、本門とは本覺門と云ふ、本覺とは真正の覺知を指すので、門とは能通と當體との義ありて能く人をして此處より堂に至らしめ、又其教義が即是れ妙悟妙處なるを云ふ、これは佛陀が法華經の中半已後の場合に説かれし教へを尊稱して名けたのである、この本門の壽量品を目鏡としてそこに證顯せられたる本尊と戒壇と題目とを取るのである、本尊とは根本として尊崇すべき實質であり、本來より尊敬すべき意義あるものに名くるので、中間より漫りに作爲せしものにあらざるを云ふ、而してこの本門の本尊の體相意義は如何と云ふに其は後に至り説くこととする、戒壇とは戒は止惡作善に名くるので、惡を止めて善を作さしむる消極積極の兩面を包羅して居るのであるが、今の戒は最上の善を作し最重の惡を諒むるので、即ち本門の本

尊を尊信するを至上善とし、之に對して違背するを最重の罪とするのである、然しながら他面より考察すれば、一切を開顯したる最大統一の主義によりての信仰が至上善であり、之は反するが最大の惡として諒めらるゝのである、題目とは妙法華經の題號より起りしも題は入文を總ぶと云ふて、法華經全部を總括し居る、而して法華經は文字紙墨の經卷に止まらず、その內容實質は宇宙の實相であり、その實相は佛陀と吾人との本體と相互の關係とであつて、その本體の靈妙なるは勿論、相互の關係は精神的に慈悲と渴仰とを交通し、その交通の媒介として最大の形式を留めしもの、即ち妙法蓮華經の五字の文字一唱一音の妙法である、而してその題目は單なる經典崇拜の思想ならざるが故に、上人は法華一部の意にして文にあらず義にあらずと教へられて居る、この三大秘法は佐渡已前の御遺文には顯はれて居ない、建長五年四月の開宗より文永八年十月の佐渡御流罪に至るまで、十九ヶ年の間は三大秘法の名を御顯はしに成つて居らない、佐渡に至つて始め

て顯發せられたのである、名稱の最も明かに顯はれて居る御妙判は、法華取要抄にして其文に云く

(遺文二〇四二)

問ふて云く如來の滅後二千餘年に龍樹天親傳教の殘し給へる秘法何物ぞ乎答て云く本門の本尊と戒壇と題目の五字と也

此に依て見れば、震且漢土の大論師も未だ弘めざりし大法を日蓮上人に依て始めてこの世の中に弘められたのである、報恩抄にも此義を顯はして問ふて云く天臺傳教の弘通し給はざる正法ありや答へて云く有り乃至答へて云く一に者日本乃至一闇浮提一同に本門の教主釋尊を本尊とすべし所謂寶塔品の中の釋迦多寶外の諸佛並に上行等の四菩薩を騎士とすべし二に者本門の戒壇三に者日本乃至漢土月氏一闇浮提に人ごとに有無無智をきらはず一同に他事を捨て、南無妙法蓮華經と唱ふべし云云

と明かに三つの名稱を擧げてある、又三大秘法抄は、全抄に亘りて三秘密を説明せられ、又值難抄にも明かな教と云ふ時は直ちにその教理が現はれ来る者である、後に詳しく話さうと思ふが、純理教義形式の三は離るべからざるもので、此三は常に繰り返さるゝものである、我は教義に依るが故に純理に依らずと云ふ事は出来ない、又純理に依る故に形式は無用なりとも云ひ得ないのである、教義中には純理を含み、之を現はすには必ず形式と成るのである、今更彼此と學者の論するは却て愚の至りである、禪宗に於て禪を尊んで佛を無視し經典をも無用とし、面壁に由つて大悟徹底せりなどと威張りて居るのは、宗教としては未成品である、釋尊は既に此事を論じてある、日蓮上人も已に此事を知つて居る、他の宗教家も已に論じて居る、純理に依て教義を廢し、教義に依て形式を廢する事はどうしても出來ない、形式は教義に依て表はれ、教義の根據は理義の上に存するので、本門の本尊は純理を基礎として教義を通ふして形式上に成り立ちしものである。

本尊の言葉は、根本より尊きの義で、本來尊むべきものなるを本門の本尊と云ふのである、宗教上第一に

れども煩を避けて今は擧げず。此等の四抄に依て三秘密の名稱は明かであるが、其他本尊とか題目とかの説明は、御妙判中到る所に示されてある。

本門本尊の意義 三密に就ての意義を更に簡單に申せば、一體本門の字を用ひしは、法華經二十八品中後の十四品に依るの義を明かにしたので、門には能通門と當體門と云ふ二義がある、門を通つて目的に達すると云ふが能通門の意味で、當體門とは門即堂であると云ふ事である、要するに本門とは本覺門とて眞實の悟りの顯はるゝ所を云ふのである、而して本門本門と三密の上に冠らせし譯は、凡て宗教の本意は教を通ふして顯はるゝもので、例へば基督の神は基督の教を通ふして顯はれ、日本の神は日本記等の古典を通ふして顯はれる、佛教にも阿彌陀經は三部經に、大日如來は大日經を通ふして顯はるゝのである、今は法門の完全なる即ち本覺門を通ふして顯はるゝが故に本門の本尊と云ふのである、教義を離れて佛教は成立しない、佛

尊崇すべきものは本尊即ち信仰の對象である、日蓮上人が此本門の本尊を顯はされし順序よりするも、上人は尤も本尊に着眼せられし人である、親鸞法然等は何等氣付く處はない、彼等は撰集に依て撰集本願を立てゝ居る、其撰集の致し方は吾人の信じ易き行の側から見たので、惡人正機などと云ふ事から彌陀本願を取ると云ふのである、唯だ單に易行と云ふのみで、諸佛と彌陀、日本國の神と彌陀、釋尊と彌陀等の關係も少しも考察を経て居らない、又眞理と彌陀の關係も充分に説明し得ない、故に本尊の網格體系を忘却せるものと斷言して得る、禪宗に於ても亦然りで、自から佛なりと唱へて釋迦何人ぞ彌陀何人ぞと云ふが故に、本尊として確立する所がない、或時は道了薩埵を信じ或時は秋葉權現を信するが如き迷信化するのである、此等は宗教の第一義を逸して居るのである、完然なる宗教は決して斯かる粗莽のものでない、宗教は信仰を以て生命とする、随つて本尊は最も大切なものである、若しも信仰にして本尊無きときは國に王なく家に父なき

と同然である、日蓮上人は本尊に就て考察を盡されて居る、新尼御前御書は（續遺文一〇九〇）

此御本尊は天竺より漢土へ渡り候へし人々の中にもするしをか  
漢土より月氏へ入り候へし人々の中にもするしをか  
せ給はず西域慈恩傳燈錄等の書ともを開き見候へば  
五天笠の諸國の寺の本尊皆しるし盡して渡す又漢土  
より日本に渡る聖人日域より漢土へ入る賢者等のし  
るされた候寺々の御本尊皆かんがへ盡し日本國最初  
の寺元興寺四天王寺等の無量の寺々の日記日本記と  
申すふみより始めて多くの日記にのこりなく註して  
候へば其寺々の御本尊又かくなし其中に此本尊は  
あへてましまさず乃至此御本尊は教主釋尊五百塵點  
劫より心中にをさめさせ給ふて世に出現させ給ひ  
ても四十餘年の後又法華經の中に達門は過ぎて寶塔  
品より事起り壽量品に説き顯し神力品囑累品に事極  
りて候しか云云

文中明かに天笠西域漢土日本の寺々の御本尊を考へ盡すと云ふ、此考へ盡すと云ふが留意すべき點である、

弘通のはたじるしとして顯はし奉るなり是れ全く日蓮が自作にあらず多寶塔中の大牟尼世尊分身の諸佛すりかたぎたる本尊なり。

此文の中に日蓮が自作に非ずと明言し、大牟尼世尊分身の諸佛すりかたぎたる本尊と申されて居る、此處には深遠なる意味があるので、詳しく申せば際限がない短時間には説明し盡せませんから略して置きます。

日蓮上人は唯だ漢土日本の寺々の本尊を考察せられしのみでなく、第一に純理の考察をしたのである、純理の考察は眞理の上に健存する人格に依らねばならんので、換言すれば法佛冥合の大人格である、哲學者は理に依らんとし、現實論者は物質に依らんとする、日蓮上人は眞理上に健在する大人格を明すのである、真言宗には地水火風空識の六大所成を論じて自から得たりとして居る、然し理のみを以て言ふ時は、石瓦も六所成であつて佛も木石も何等變る處はない、又唯だ存在のみを云は、既に科學上に物質不滅を論じて居る、宗教問題は智惠あり慈悲あり活力ある即ち靈妙の

この信仰して新ると云ふ事は殊勝の事ではあるが、此頃東京市長が、神田明神に馳せ付けたと云ふ様な事はどうであろうか、新るには處もあると思ふ、實に思想界は混沌たるものである、新るは可いとしても新るには祈るべき道がある、此度の事に就て眞宗にては祈る事が出來ぬと云つて困つて居ると云ふ、日蓮上人は此本尊を御顯はしになる時に當て非常なる喜びを表白せられたる、日女御前御返事に云く（續一六二四遺）

さて滅後正像末の中には正像二千年にはいまだ本門の本尊と申す名だにもなし何に況や顯れ給はんをやられて居る、日女御前御返事に云く（續一六二四遺）

又顯はすべき人もなし天臺妙樂傳教等は内には鑒み給へども故こそあるらめ言には出たし給はず彼の顔淵が聞きし事意にはさとるといへども言に顯はしていはざるが如し然るに佛滅後二千年過ぎて末法の始めの五百年に出現させ給ふべき由經文赫々たり明あたり天臺妙樂等の解釋分明也爰に日蓮いかなる不思議にてや候らん龍樹天親等天臺妙樂等だにも顯はし給はざる大曼茶羅を末法二百年の比はづめて法華習ひそないの學者ゆめにも知らざる法門也云云此の「一念三千をふりすゝぎたてたる大曼陀羅なり當世の大人格であるべきである、之を嚴格に主張したのが日蓮上人である、草木成佛口決に云く（續遺七四六）

一念三千をふりすゝぎたてたる大曼陀羅なり當世の大人格であるべきである、之を嚴格に主張したのが日蓮上人である、草木成佛口決に云く（續遺七四六）

習ひそないの學者ゆめにも知らざる法門也云云此の「一念三千をふりすゝぎたてたる」との文尤も着想すべきである、之は印度支那を経て日本に於て始めて顯はされたのである、章安大師は一念三千を稱歎して天竺の論師も震且の學者も是に及ばずと云ふてある今迄の眞言の六大所成と云ふも華嚴の唯心法界と云ふも皆一念三千の焼直しに過ぎない、一念三千の明鏡に照す時は何等特殊の價値あるものでない、此一念三千の法門は理論的思索的なるも、之を一轉進して大信仰に入るべきである、法然上人の如きは、一念三千の理性の方面を捨て、感情の上より彌陀を立てたが、日蓮上人は天臺の一念三千の理性の頂點に達して之と融合して熱誠なる信仰に進み、即ち一念三千をふりすゝぎたる大本尊に達したのである、眞理の頂點に達し更に進んで眞理の上に健存せる本尊を奉じ來つたのである

日蓮上人は觀心本尊抄に摩訶止觀を引き來つて本尊を説明せられてある、又開目抄には(續造七六五)

然りと雖いまだ發述顯本せざれば眞の一念三千もあらはれず二乘作佛も定まらず水中の月を見るが如く根なし草の波の上に浮くに似たり本門に至て始成正覺を破れば四教の果を破る四教の果を破れば四教の因やふれぬ爾前述門の十界の因果を打破つて本門十界の因果を説き顯はす此即本因果の法門也九界も無始の佛界に具し佛界も無始の九界に備りて眞の十界互具百界千如一念三千なるべし云云

唯だ單に互具を論ずるとも、眞に尊とき人格即ち佛の實在を明かにせなければ、其法門は信仰の妙致に達することは出來ぬ、此れ理本事迹と云ふ學者の通弊である、日本在來の多くの學者は即ち是れである、法律倫理にても理論的に見て、現實の社會と國家と生活とに合せざることは取るに足らぬが、上人も當世の習ひそこないの學者の一語は凜として聲ありである、此純理と佛とを明確にし確實なる基礎の上に本佛を奉じたる

である、眞理上より云へば他の本尊は「ほうろく千に拵一つなるべし」と云ふやうなものである、阿彌陀佛などは「ほうろく」の如きもので、たゞ一打ちで微塵に紛碎さるゝのである、

更に考察すべきは本質と寫象との關係である、本質としては上人の主義は統一主義として顯れ、形には文字及び木像として顯はれる、基督教に於ては佛教を評して偶像崇拜と云ふが、彼等は未だ宗教形式の研究が足らないのである、吾人の崇高なる思想を指導するには必ず耳目よりすべきで、佛教には聲色の近名を尋ねて無想の極理に至ると教へてある、眼と色耳と聲意と法は相對立して離るべきものでない、故に宗教は常に眼耳意の三を活用して教を與ふるのである、若し形式を廢せんか、教育上に云へば、實物若くは圖書を用ゐて兒童に「子」<sup>きこ</sup>と教へんとする如きもので、其方法の全からざる到底堪へらるべきものでない、故に繪を以て目より教育を助くる必要がある、基督教は此方法を失ふて居る、真理教義形式は共に併べ用ふべき

のが、日蓮上人の主義の中心生命である、若しも純理の基礎が無かつたならば、理性の目を醒ますとき忽ちに破却さるべきである、故に「有爲の報佛は夢中の權果」と云ふ、阿彌陀佛の本願を説くと雖、彌陀は有作の報佛にして根本的説明を失ふて居る、故に夢中の權佛となるのである、例へば活動寫眞の如きもので、色々なる形となつて現れ動いて居るけれども、近寄つて見れば白い幕ばかりである、西方に安養淨土ありと思ふて往きたい往きたいと願ふて居つても、往つて見れば淨土はない、恰も活動寫眞に寫つて居る美人を夢みて居るが如きである、此意味を日蓮上人は觀心本尊抄に分明に論斷してある、即ち眞理の基礎の上に本尊を健存するのである、而して此純理上に立てらるゝ大人格の實在を教義として顯發せし經典は、本門壽量品なりとするのである、即ち左の意義である

### 純理——法佛不二の大人格

#### 教義——壽量品の顯説 形式——曼荼羅の圖顯

である、片目の猿が両目の猿を嘲けるが如きものである、佛教には「聲字實相」と云ふて、聲即實相文字即實相と云ふ、聲を離れ文字を離れ實相を教へんとする方法の整はざるもの、我等には默識神通も一の方法ではあるが、一般人は囁み碎く様にして教へてすら知り難い、況んや破顔を見て眞理を悟り得ることは出來難い事である、故に佛教には此文字と聲とに依て實相を教へたのである、實相が聲に現はれ文字に現はれ、此現はれに依て實相を知るのである、今日文藝によりて社會を導くも、繪畫文字を以て人心を誘ふのも此理である、併て佛教徒の中にも形式に囚はれ、或は合掌はどうの印相はどうの或は坐像はどうの音聲はどうのと非常に八ヶ間敷云ふものがある、日蓮上人を研究する人としても之を云ふものがある、これ等は形式を捨つる輩と方面を異にして極端に走り共に正鵠を逸して居るものである。

木像は動かない、然し本質の佛より云へば常に活動して止まない靈體である、木像が東向さとか西向さと

か、或は手が上とか下とか論すべきものでない。日蓮上人は之を看破せられて居る、真言天臺勝劣抄に  
凡そ印相尊形は是れ權經の説にして實教の説にあらず設ひ之を説くとも權實大小の差別淺深有るべし所以に阿含經にも印相あるが故に必ず法華に印相尊形を説くことを得ずして之を説かざるにあらず説くまじければ是を説かぬにこそあれ法華は只三世十方の

佛の本意を説て其形がとあるかうあるとは云ふべからず例せば世界建立の相を説かねばとて俱含より劣るとは云ふべからざるが如し。

法華の佛は完全なる大人格である、而して其妙用を信すれば足るのである、此意味に於て佛の作り方向き方等を彼此論する必要はない、木像が立派とか不立派だとか云ふが、金があれば立派に出来るので、金が無いから立派に出来ないと云ふに歸するのである。

次に純理の意義 即ち眞理の方面に於て實在の意識を明かにする必要がある、之に依て寫象を見れば明かになるのである、壽量品に「雖近而不見」と云ふはこれ

します事を説かれてある、又守護國家論に(續道二五八)

法華經を信せざる人の前には釋迦佛入滅を取り此經を信する者の前には滅後なりと雖佛の在世也

又持法華問答抄に(續道四七七)

暮れ行く空の雲の色有明方の月の光までも心をもよほす思也

と仰せられてある、色彩ある雲の色の彼處に本佛の實在を認め、又我等が無意味に見る月の清光にも實在の本佛を仰ぎ得るのである、如斯自然と離れず到處に實在の信仰は生ずるものである、是が激動たる生氣ある日蓮主義の信仰である、

次に統一主義 日蓮上人の本尊は統一主義である、

曼荼羅を見て只具足して缺けすとのみ思ふは誤りであ

る、姉崎博士が曾て「何でも來れ宗は癩病宗である」と云はれた事がある、日蓮宗の現今の有様にも癩病宗の傾きがありはせないか、上人の主義は決して左様のものではない、開目抄に「天月水月の譬へを以て仰せられてある、天の一月萬水に影を宿す、然れども天月水

である、神様が頭べに宿ると云ふ意味合は、左にも右にも身邊に親しく存在せる事を知るべきである、彼處迄も行かんければ御利益がないとか、開帳せんければ御真體を拜することが出來ないと思ふのは、未だ實在の意識を得ないものである、鬼子母神は中山にありとか御祖師様は身延にありなどと云ふ者は甚だ愚かな者である。

月も降り降らす水も昇り昇らす、而かも一月同時に萬水に映するが如きものである、我等の信念一たび至らば直ちに之と接觸し得らるべきものである、設へ千里の遠きにも信念力は忽ちに到達することが出來得る、今日では無線電信があるが、我等の信念はより以上に靈妙なる作用を持つて居るものである、之は佛教者の大に注意を要する所である、法華經神力品には「即是道場」と云ふてある、爰に信仰を起し思想を發揮すべきである、即ち園の中に於ても林の中にも、若しは樹の下若しは僧房に於ても、若しは白衣の舍若しは殿堂に於ても一念の信仰を起す時は、直ちに佛の感應在

月同一なるものに非ず、之を混同して同一の如く見るのは愚者である、猿が水中の月を見て入つて取らんとし、終に水中に墮ちて死せしが如しと仰せられてある、天台大師は不識天月但觀池月と云はれてある。

發する時は千變萬化の應用其數無量なりと雖、經むる時は直ちに統一の大人格に歸するのである、此思想に依らずんば上人の思想を會得する事は出來ない、是れ實に日蓮主義の根本義である、之に就ては我國の神明と本佛との關係を論じて見やうと思ひますが、時間の都合で今日は之れにて降壇致します。

松野殿御返事に云々

菩提心を發す人は多けれども選せずして實の道に入る者は少し都て凡夫の菩提心は多く惡縁にたゞらかざれ事にふれて移りやすき物也

# 海外の發展

(承前)

海軍大佐 佐藤 鐵太郎

菩薩の疾は大悲より生すと申しますが、陛下の御

大患は、實に我等臣民に神明より下り置かれたる御

御咎めであります、誠に以て恐懼の至りに堪へませぬ

次第であります、乍去今や我等六千萬の同胞は、老若

男女誠心を捧げて陛下の御快愈を御禱り申上げて居ます、假令形式を具へずとも、假令宗派の規則により

御祈禱を捧ぐることが出来ません様な不幸な人々でも

心の中で祈らぬものは一人もないのであります、真宗

の某僧侶は宗規の爲には祈禱は出来ぬが日本國民として

御禱り申上げなければならぬと云ふて、毎夜二重橋

外に参りまして、御願を籠めて居るそうで誠に以て

殊勝な事であります、殊に御大詔とも拜すべき今回の

御不例により、我國の未來の國民、天照皇大神以來大

御寶と仰せられたる我等臣民、而我國の未來の國民たる小學生徒に深厚なる信仰の心を感得せしめられ、我

優劣如何を論ずるは不謹慎の至りであります、但生

不滅本有實在の本佛を戴くとの意義に於て同一なる國體にあらざれば王佛冥合法國一致の妙體と云ふ事は出

来ないのであります、若し萬が一にも此の冥合一致の意義が不完全であるとするならば、決して眞の國體と

稱することが出来ない、法の爲に國を忘れ國の爲に法を遺るゝが如きは悲むべき次第であります、國と

法との間に優劣があるとして、到底この悲みを拂ひ去る譯には参らぬのであります、加之天に二日なく國に二主なきは天地自然の道理であります、國に二人の

王ありては平和を望むことが出来ません、世界も亦この通りであります、法國冥合の意義を完備する國が世界に二つあるべき道理がない、三界は悉く我有なり其中の衆生は悉く是れ我子なり而かも此處諸の患難多し唯我れ一人のみ能く救護を爲すと仰せられてあります

(13)

菩薩の疾は大悲より生すと申しますが、陛下の御咎めであります、誠に以て恐懼の至りに堪へませぬ

が、世界に我國の如き他國なきは怪むに足ります、他にも我國の如き國がありましたならば如來は必ず妄語の人でなければなりません、法も一つ國も一つ

堅固なる御國體を彌が土にも彌高く遊ばされたる御神意は唯だ／＼感激に堪へざる次第であります、是迄混沌たりし思想界も統合せられ立派なる光輝を發し

天晴我國の天職を盡すに足るべき大國民となり、天の岩戸より御出で遊されたる天照太皇神を拜するが如く彌々麗しき龍顏を拜し奉り、勇み進んで御聖漠を翼賛

し奉る事が出来る下わります、最早今日は我等同胞の涙を以て御願申上げたる御祈禱を受けさせらるべ

きではありますまい、一昨夜も八代將軍が仰られました通り、我御國體は無上に御立派であるが我等國民の醜いこと甚しき、之は如何にも御尤もであります

が、今度の御大患に驚かされたる國民は、之迄飲み込

みました毒薬を吐き出し毒思想を拂ひ去らして、乾

度著明なる思想界の變化を示す事であろうと信するのであります、果して然らば我國の天職を全ふせんがため、我等臣民は頭には天皇陛下の御威儀を戴き、心に

は不信身命の志を堅くし、勇み進で聖漠を翼賛し奉る事が出来るであらじよ、我御國體に就て軽々しく

が眞理であると信じます、法國冥合は我日蓮上人の大理想であります、宇宙の代官として日蓮上人の仰せられたる御言葉であります、法より見れば一天四海皆歸妙法、國より見れば八萬の國にも躊躇へたる國であります、若しも佛法が必ず東土日本より出づべきならば、王法は何故に東土の日本より生ぜざるべき理由があります、若しも佛法が必ず東土日本より出づべきならば、法と國とは其存立の意義に於て同一であります、然ればなればきぬ、相反対する如きものでは正しき法

とも國とも云ふ事が出來ません、然るに法然上人は時を見て國を知らず、易行の一門を開かんが爲め阿彌陀如來を選舉したのである、親鸞上人が「タトヒ法然上人ニスカサレマイテセテ念佛シテ地獄ニ落タリトモ更ニ後悔スヘカラズ候其故ハ自余ノ行ヲ勵ミテ佛ニナルベカリケル身ガ念佛ヲ申シテ地獄ニモ落テ候ハヤコソスカサレタマツリテト云フ後悔モ候ハメイザレノ行

くはありませんぞしよか、法然上人がいくら上人であります

も、恰度議員の選舉に善導上人に教へられて候補者の指名に盲判を押した様な譯ではありますまいか、他の人を選舉して見た所が別に碌なものがいなら法然上人の選舉した候補者で満足しようではないか、之は如何にも酷評ではあるが、何となくそんな意味もある様に思はれるのであります、假令法然上人が立派な人を選で呉れても、それは法然上人の願で選舉したので決して何の根據もある譯ではないのである、故に彼の思想を以て國家を見れば、共和政治であります民選君主である、又議論に議論を重ね研究に研究を積んで見た所が、或は又如何に立派なる理想の上に宗教を打立てゝ見た處が、理論のみを以て成立したる宗教は立派な理學か哲學かは知らぬが立派な宗教ではない、如何に神變不思議な神通力の様な事を蘊藏して人の病氣を癒したり、甚しいのは悪人の爲に善人を禱り殺すと云ふ様な奇談を以て人を引きつけて見た處が、遂へる信仰に成立したるものには眞の宗教ではなかろうと思ひます、全體ア、云ふのは宗教其自身に融合がない、理と冥合致すのであります、則ち諸の患難を救護せんが爲の唯一無二の大法で而して亦世界の大平和を確持せんが爲めの唯一無二の大國でなければなりません、例へ國は小さくとも人は少なくともこの意義に於て立派なる大國であります大國民であります。

乍併如何に崇高偉大なる正法も其弘通には大なる困難を見るが如く、假令如何に慎重に吟味して當然踏むべき道を踏みました處が、刀杖加撃の苦あるが如く、我國の天職遂行の前途には幾多の大難あつて横はるには相違ないのである、我大日本國の大發展は則大なる菩薩業である、世界を救はんが爲めの菩薩業であるが、丁度白法の弘通と同様であるから、如何に困難に逢ふても諸天善神の加護を受くべきこと勿論であるが、少なくとも法華の行者たる日蓮上人の正法弘通の爲に受けたる迫害位はあるものと心懸けなければならぬのであります。

此前にも申上しました通り、海外發展は實に我國の天職でありまするので、如何なる事よりも大切な事であ

想と信仰との間に寄り合夫婦の如きもので、如斯ものを以て御國を守ろうなどとは思も寄らぬではありますまいか。又ア、云ふ事は行つてはいけない斯う云ふ風な事は斯う云ふ風にしなければいけないと云ふて、法律の様なものを以て身と心とを縛りあげて十トカ二十トカ乃至二百五十トカ云ふ様な御規則で立派にならうとするのは、則ち法治國の様なもので法律萬能思想と同一であればせないでありますか。直指人心見性成佛狗兒有佛性我人なり佛も人なり、僧洞山に向ふ如何なるか是佛洞山云く麻三斤と云ふが如き鹽梅は如何にも壯快であるが、必竟ランビキニカケソコネタ様な箇人主義民主主義でおこなはせますまいか、之に反し我妙法蓮華經は法然上人の選舉したのでもなく、また天臺大師傳教大師の選舉でもなく、日蓮上人の推薦でもなく、大聖釋迦自身の御宣言に因りたる正法である、乍恐「我御子の知さん國」也と遊された御宣言の如きものであります、如斯無上崇高なる意味合を以て説かれたる大法こそ眞の大法で、是等の意味合に於て正に我御國體もさするが、日蓮上人も仰せられたる如く「夫佛法を弘めんと思はん者は必ず五義を存して正法を弘むべし五義とは一ニハ教ニニハ機三ニハ時四ニハ國五ニハ佛法流布の前後なり」とありますので、この意味を服膺すると同時に「諸苦の所因は貪欲を本とすと御座ひまむるが、日蓮上人も仰せられたる如く」夫佛法をすむ譬諭品の戒に注意すれば宜むい事と信ずるのであからずが、何に致せ目的が大きいのでありますから餘程の決心を持たなければなりません、殊に又一時的の事ではなく永久的の事でありますから、何うしても餘程の邁進的勇氣と耐久的勇氣とを以て之に當らなければなりません。先申上ゆけましや道、我日本の爲し遂ぐべき大事業を實行するには大なる意氣込を要するは勿論であるが、まずするので、先第一に古來の訓戒を慎重に調査し、海外發展の第一義を明らめなければ、聖賢な意氣込を要求する譯には参らぬのであります、退て古來の歴史を考て見てすれば、海を制するものは世界を制すとは千古不磨の金言であります、此言葉は他の人からならば兎

(16) に角、海軍軍人からこう云ふ言葉が出ると申します。

と、如何にも不條理不興味に思はるゝであつて、どうしようが、而し日蓮上人も仰せられたる如く如何に下賤な腹

に宿ても王種は王種である、魚と鳥を混丸して赤白二  
潘となしたる畜身より發するとも、妙法は妙法であら  
まえ、色心不相應の故に愚者の悔るも道理ではあるま  
せが、眞理は何處迄も眞理であります、日蓮上人の如  
き大人格を通じて仰説せざる少法<sup>レ</sup>すして、首の上

に雪が降つた様に寒さの意味は更に一段の寒さを加ふ  
るが如き鹽梅はあるはずの事か、眞理は何處迄も眞理で  
ある事す、併し古來の歴史家は兔角と丘異が多う。

のである。ナポレオン半を考ると其偉大なる事業に駄目せられて其背景が見へなくなる。シーザーの事蹟を見ると肉が振へる様に壯快に感するが、之等皆着眼の大ならざるを證するのである。はしき美談でも、佛蘭西の命は彼の時に實に旦はしき美談であらず、佛蘭西の命は彼の時に實に旦

冷静なる眼を以て古來の歴史を考て見合せると、華を  
陸上に開て實を海上に結ふと云ふ様な風であります  
で、世界的大國は皆悉く海上に成功したる結果として  
顯はれざるものはないのであります、近頃に至り漸く  
の古に對して生産する通商政策を見られて至つたのであ  
がつて

この點に對して注意する國東家を見るに至つたのであります。而して彼の有名なるオランダとの如きは人間の運命は航海と隣國の戦争によりて發展したり成熟したりするものであると斷言する様になつた、故に航海の業を興したり海を隔つる隣國と戦ふことの出來ない山間の瑞西は、到底世界的大國となることが出來ぬのであればすが、有名なるヨーナーレー等が三百年前に「海を支配するものは貿易を支配す貿易を支配すると私は信配する」と云つたのは誠に立派な金言であると私は信富を支配す世界の富を支配するものは世界其物をも支配するのであります、而して實に海上に發展すれば世界的海國になれると云ふて見せられた處が、それは中々その云ふ譯には成れませぬ、捨閉閣地と云ふて立派なる敵を捨てゝ唯だゝ行ひ易き方法に計り進む様なこと

夕に逼つたのであります、一小婢に過ぎざるイチャンダーコークは奮然天下の重を負ふて蹶起す。しかし之に自分を神託を受けたと號して驚くべき神通力を顯はして人心を奮起せしめ、自分で敗餘の兵を連れて英軍を敗つたのであります、若しも目を冥つて當時の有様を考て見ますれば、彩旗を携へたる白馬銀甲の美人が、駆み躊躇打壊られたる焼跡の間に愁然として佇んで居ると、其背後に勝利の光明が一層の寂しさを加へて冷かに顯はれて居ると云ふ鹽梅である。日條時宗が大事の如何にか向上せしと云ふかと思へと威を振ふて大喝したる當時の雄姿ばかり見るので、矢張其背景には殆んど地獄圖の如き悲惨極まる壹岐對馬の様子が顯はれて居るのに氣が付かぬ様なことではいけません、凡そ世界の歴史は先づこんなもので大抵いたゞ騒ぎの三面記事の様なものが多いのでありますから、三面記者の如き歴史家の目に映し立つた事實としては、英雄豪傑の奮闘振り計りであります、乍併ではいけません、日蓮は先陣に進むから若黨共は二陣三陣に續けと云ふ如き勇猛心を以て積極的に行らなければならぬと云ふ事は勿論であるが、そればかりでも假令一時は目的を果すにしても永く續く譯には參りません、前に申ました通り、玉椿や兩國は立派な相撲取である、併しどうも横綱は無理である、小當陸は如何にも勇猛精進の男で氣味の宜い相撲取であります、果して能く大關になり得るであらえしませうか、假令大關になつても永く續くことが出来るであらえますが、うか、是等は何うしても先天的資格がなければならぬ、海外發展も矢張其通りでありますので、我國の如きは御國の使命より生じざるもの自然的作用に於ては、他の邦では到底望むべからざる大なる資格を持てるのであります、唯だ神祕的な資格のみではどうも不安心である。本徳の大陸の第一強國たるフランスが海外發展の意義を悟り、英國を打ち倒して世界的大國となるうと致しました事蹟を見ましても、此處の道理を明白にする

事が出来るのであります、佛蘭西の「リ・シ・ユ・サ・エー」「エ・ル・バート」等は海外に發展しなければ、到底世界的の大國となるべき資格がないと云ふ點に着眼致りまして、熱心に之を計畫したのであります。が、「ユル・バート」の時代になればしては殆んど英國を凌ぐに足るべき海軍を有するに至つたのであります。が、英國は對佛大政策を定めて終に之を打ち敗つたのであります。元來佛蘭西は到底永遠に世界的大國たるべき資格がないのであります。それは何故に資格がないかと考て見よすると、大陸に本國を有するからと云ふ一點に歸着するのであります。此時代佛蘭西は、殆んど有りと在らゆる方法を講じて英國を壓倒せんと企てたので、つまりは國王陛下の外賓接待用の椅子の金銀珠玉をも賣り出して戰費に供すると云ふ意氣込であります。如何に熱心に英國に對する海上武力を擴張しようと思ふては居りますが、獨りで相撲を取る様な次第には參りません。何分共に大なる軍備を要するので海上専門の英國には、敵する譯には參りません。則西王繼嗣問題、後の西王家

經費を供給したのであります。この場合の様子は英吉利に居た普露西の大帝「フレデリッキ」大王より送りた手紙に「今年は首尾よく勝たが來年は果してどうか」と云ふ様なことを書いてあるそで、夫丈でも英國の用意の如何に周到なるやを察することが出来るのであります。英國の戰策は先大體こう云ふ風であります。が、佛蘭西の方では本國の防禦の爲には大なる陸軍を備へなければならぬと云ふ事になりますので、どうしても專心海上事業の發達を計る譯には行きませんので、つまりは海上にのみ力を用ひた英國に克つことが出来ずして失敗したのであります。斯う云ふことを申しては済まぬかも知れませんが、獨逸の今日の有様は誠に目醒しいことで、英獨兩國は何うしても海上に大衝突を起すべき機運に向ひつゝある様ではあります。が、若し英國が手段を誤りましたならば、兎に角如何なる方法にもあれ獨逸國の背後を制すべき大陸國と協力したならば、獨逸國も又たルイ十四世十五世の覆轍を踏むべき道理であります。芬蘭の英國に敗れ

の御家騷動の様な譯せ筆トした時には、英塊二國と佛國との關係上、英國は「マルボロ」公爵に兵を付けて歐羅巴に渡らせ、換國「アリンスユーゼン」と共に背後より佛蘭西を突かしめ、夫から又七年戰役の時には、「フレデリッキ」大王に五萬の兵を養ふべき軍費を供給して「ルイス」十五世の背後を衝かせたのであります。「フレデリッキ」大王は有名なる方であります。が、戰史を調べて見ますとこの當時に佛蘭西は二十一萬の兵を持て居ましたから、「フレデリッキ」の十四萬の内にも英國の補助を受けた軍隊があるのであります。此の十四萬と英吉利の費用で養ふてある「ハノーバー」の五萬の兵とを合せ、十九萬の兵を以て佛蘭西の二十一萬に對し僅かに勝利を獲得しつゝあつたのであります。そうして此際の事を注意致すべきは「フレデリッキ」に是れよりも以上の兵力を與へるならば、乾度佛蘭西を取つて仕舞ふであろう、そうすると今度は第二の敵國を造ることになるのであるから、僅かに勝ても少しも餘力のないと云ふ程度に止める爲五萬の兵を養ふ丈のましたのも西班牙の海上を退きましたのも皆な同一の道理であります。するから、此の一點から考へて見ますれば、其の本國が大陸にありとする以上は海上發展の目的を永遠に全ふする譯けには参らぬのであります。

如斯次第であります。するから、大陸國が世界的大國として到底存在することの出來は最早何の疑もないことで、之等の關係は能く注意しなければならないのであります。が、假令一時は大陸に於て大なる發展を致しても、それは矢張一部分に局限せらる、ので到底世界的と云ふ譯には参りません。夫から又一時は海上發展に成功して世界的大國となりせしても大陸國と申しまする場合には、何時でも只今申上げた様な事となりまするので、之を永遠に其位地を維持することは出来ない

此處の道理が海外發展上最も注意すべき點で、此地的資格に於て不完全であります以上は、如何なる方法を以ても永久的に確固たる海上事業の繁榮を見る

ことが出来ません、海上を管制するものが世界的其物も管制する以上は如何にするもこの點を重視しなければならぬのであります。

(八) や外考  
度の理  
のやえ

法國冥合の意義から法國足並を捕へ、相携へて一天四海皆歸妙法の事實を擧げんが爲めには海外發展を要するは無論であります、然るに我帝國は久遠實成の大帝國、本有の絕對位を戴く大帝國は、其天職より察するも其地理的關係より察するも、海外發展の大事業を完成すべき資格を有するので、唯だ勇往邁進してこの大事業を完整すれば宜しいのであります、實際に於ては海外發展が結構だからと云ふて漠然として讃める譯には參りません、如何なる方面に向ても直進して差支ないかと云ふと決してそうでない、尙更に注意しなければならぬ二點があります、則一は海外發展の眞意義を探究すること、それから今一つは海外發展に對する國民的資質を詮索するのであります、此外にも時機の問題もあり順序の問題もありますが、私は此二點を述べんと欲するのであります、今茲に二

ことが出來ず、一方には同化に力むる、同時に他の一方には可成之を國外に追拂ふとして居るのである、既に臺灣を併せ朝鮮を併せ人口二千萬を増加したる我日本帝國は、後來の發展上この點に注意するの必要ないであります、三國並に一闇浮提の人懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王帝釋等も來下して踏み給ふべき戒檀を我國に建てんには、敕宣並に御教書を申し下して靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒檀を建立すべきものか時を待つべきのみと日蓮上人の仰せられたるが如き、尤も注意すべき所であるとおもふ、世界各國の來朝は時を待つべきである。我國は斯かる場合となるべき運命を確然として存立するのである、唯だ問題とするは時のものであるので、從て能く時を考へ少しも無理の這入らぬ様に致さなければならぬのであります、若しも我國土の擴張を欣び又我事業の發展の面白さに浮され、事大主義や革命主義を生命にするが如き思想を其體に我國民の間に注入したならば、それこそ思想上的大事で、渾沌たる思想界に更に一段の混

ツを一つにして簡單に申述べようと存するのであります。

の先第一に我國民の同化作用の大小であります、若し此點に尙不充分の點があります以上は、比較的に開明なる方面に向て發展するのは他を同化せんと欲して反て他に制せらるゝと云ふ譯で、怡度宗論に敗けて改宗せなければならぬ様になるのであります、假令夫り迄にはなりませんでも異民族を包擁すると云ふ事は、果して美はしき我御國體に對して危險なる思想を持ち来すと云ふ事にはなりはせぬでありますか、例へば悪い病氣を持って居る人と結婚する様なものではありますまいぞしょか、「ルーズベルト」の論する如く國と云ふものは早晚亡ふるものである世界人類の爲に貢献する所の大なる國は偉大であると云ふならば、一時興奮の爲に毒藥劇薬を飲んでも宜しいでありますか、我國の御國體から見て見れば、斯の如き近眼の議論を信じて其儘に之に從ふ譯には參りません、普露西の如きは僅か二百萬に過ぎざるボーランド人をも同化する難を増加するのであるうと思のであります、我大日本國には永久と云ふ事は何よりも大切で決して亡滅と云ふ事を許さぬ國であります、假令一時は如何程成功致しましても世界第一の大國になつても、時に協はぬ發展は不祥であります、如何に他の諸國には適當な方針であつても我國にも良いと云ふ譯には參りませぬ、之は日蓮上人の大に御苦心施された點でありますので、「彼の國に好からし法なれば此國にも好かるべしと思ふべからず」と仰せられたるは割ち此道理であります、然らば果して如何なる方針によつて我國の發展を試むるのが最も必要であるでありますか、之を研究的に申しましたならば、同じ發展と云ふても政治的經濟的民族的發展に分ける事が出来る、又同じ經濟的發展でも商業的或は農工業的發展もあるのでありますか、之等の分類を研究するのはこの講演の目的でありますから抄略致しまして、海外發展の有様に關する私の所感を述べて講演を終らうと思ふ。

を崇信する爲に、外人は勤もすれば我國民に對し我體を働くことが多いと云ふ點であります、外人を崇信すると云ふ事は實に我國民の美德であつて、我國民の偉大なる所以も主として此點に在るのであります、東西文明の融合者統一者たるべき資格も此點に俟つ所多いのであります、乍併西洋人を指して白哲人種と云ふはまだしも之を誤て白哲人種と云ふて居る、又立派な學者は寧ろ白哲の方が事實であるなどと云ふ人もある、何れにもせよ斯かる有様ではならない、如何に人を敬する場合に於てもナーニに場合に依つては負けはせぬぞ」と云ふ氣力がなければならぬ、私は世人の數々云ふ如く、銀色人種を以て西洋人を稱へ金色人種を以て自から稱したいのであります、亞米利加邊で能く聞く話しでありますが、日本人は何うしても米國人に同化せないから良くないと云ふ事であります、そうして之を日本から聞くのであります、日本人は西洋の習慣を重んじ西洋の着物を着西洋の食物を食し西洋の家に住み西洋の思想を尊ぶのであります、西洋人の體裁はどう

本人も此點に留意したならば大成功を期し得るであらうと思ふ、私が布哇に於て殊に愉快に感じましたのは、此點に對する傾向を顯はして來たと云ふ點であります、夫は布哇には出稼人の渡航が止まつたので自ら永住者を生じた爲であります、砂糖會社の方では受負の組織を作つて小作人と大地主との關係の様にしたので、勉強すれば勉強する程同一の地面から澤山の「キビ」が出來ると云ふので雙方共利益でありますから此方を獎勵するとともに一方には本道の夫婦共稼ぎと云ふものが現はるゝ様になつた、夫は新たに茹取りた「キビ」を背負て居る、妻君は小供を背中に戴せたまゝ、其荷物車にある分量を度りて夫に相當した代價を支拂ふと云ふ様になつて居るそであります、背中に居る小供も「キビ」を持揚るたびに頭を左右にかはしながら母親の背中に遊んで居ると云ふ風であります、如斯神聖なる勞働は世の中にありましよか、商人の努

うであらうが、一つでも日本の眞似をしないで居りながら日本人は同化せんなどと云ふのは自分の息は臭くないと同であります、私は西洋人が若し日本人が同化せない國民だなどと云ふたら、ヨーク自分の事を考へて云ふて下さいと云ふて忠告をしてやりたいのであります、此事は米國在留人や領事などにも話した事があれば、一人や二人はこう云ふ風に言ふて居る人もあるであらうと思ふが、此問題は重要な事柄でありますので尤も詳細に研究して海外の發展を計らなければならぬ、彼の英吉利の到る所に其殖民地を有するは全く其國力の御影ではあります、一には英國民は到る所泥を金にする方針を探りまして、今日比土地を買入れ草芭々たる儘に數年を経過せしめ、其土地の價格の騰るに從て大なる利益を得ようとするが如き、又濡手で泡と云ふ様な考を起さずして、自分の力のあらん限りを盡して其土地を拓て其地の富を増すと云ふ風でありますので其事業は何時でも堅實であります、若し日

力は勿論尊いには相違ありませんが甲の物を乙に送て其流通を付けるので、直接に天地に隠れて居る富を拓くと云ふのではあります、之等の夫婦は泥を汗でこねまはして立派な富を拓くのであります、如斯して天地に御奉公致して居りさへすれば一時は薄給の爲に苦しむであります、其報酬が少なければ少ないだけ天地と云ふ銀行に對して多くの金を預けてある様なものであります、乾坤丈丈の幸福は繩まつたものとなつて来るであらう、人間の眞の幸福は正當の道を踏んで働くにあるので其報酬を貰ふと云ふ點ではないのであります、よし地獄に墮て無量の苦を受くとも決心があります、況んや日蓮上人の仰せられたる如く、「女房と酒打飲みて南無妙法蓮華經と唱へ居させ給へ」と云ふ風に、彼等夫婦のものは日暮れの涼風に夫婦の間に書間働て居るとさに背中に負ふた小供と背中に負ふた骨折りの代とを並べ、無限の樂を覺へつゝ南無妙法蓮華經と唱ふるであらうと思ひます、私は我日本の同胞

がこの様な心持を以て働きましたならば、海外發展の事業は朝日の昇るが如くであろうと信じますので、我國が大陸に介在せずに海上にあると云ふ雄大な天幸は、更に海外發展事業の有望にして確實なるを證する云ふ大切な點を考て見ますれば、更に一層の有望なるを感じるのであります。(完)

(昭和二十五年)



## 聖祖門下 雑誌記者 會の記

日蓮主義は形式教團の占うでない、かゝる狭い小さい浅い教ではない、全宇宙の大流であつて人類最後の歸着を教えるものである。日蓮主義を奉ずるもののは物質的劣情を満足せしむることは出来ない。富める教である、ことに日蓮門下の一員として、遣訓をまもりて一分だにも口力奮闘する事を得立つることが出来る、我同志相會して虹の如き氣焰を揚ぐるものといが、實驗的信仰が大事である、實際的教化の衝に當ればならぬ、我記者會は既に相約して講演會の開催を決せしより「此度佛法をみよ」との撰時抄の大警告を行ふて居る、九月二十五日午後二時統一館にて第六回講演會を開催して、児島村雲老人記者官田布教記者三上統一記者は、各自獨特の廣長舌を以て多大の聲益を與ふるものがあつた、其日午後六時より淺草雷門より樓上に晚裝曾を離かして、相互の交情をあたへ、吉永樓主の歎待をうけて何となく、氣持よく別れを告げたのは午後八時半であつた。(白先生)

### 講妙會

本會は毎土曜日午後一時より統一閣樓上に開催講師本多日生師は上人が本化上行の自覺に立て學生の心血を注ぎ大雄院大理想な願被せられたる開目抄の大精神性大綱領を把握し或は轉意的に或は文字身に就て講述せらる、講師の卓越なる識見轉寫なる資料熱烈なる講説は、直ちに上人の聲咳に接するの思ひありて自覺と敬慕の情いよ／＼深し、聽講者は八代宮岡海軍中將中山少將松本少將川島少將小原陸軍少將佐藤大佐菅渡大佐五島子爵矢野檢事林檢事山川參事官其他當代一流の名士數十名、何れも敬虔なる態度を以て研鑽の歩を進めらる、爲道悦びに堪へざる所也

## 佐渡に於ける日蓮上人(承前)

文學士 小林一郎

先達て佐渡へ行きました巡拜の途中の事を少し御話を致しました、實は彼地に於ける一二の所感を述べる考で、本日は其に續いて佐渡に於ける上人の御状態の一斑をお話致すつもりである、先達て私の佐渡を巡拜せし其の道筋は新潟より夷に至り、漸次寺泊りを経て歸りました、上人は其とは反対の順路を取られたのである、即ち我々は逆に方向を取つたのである、上人の専門家でない諸君に御話をお話するは當を得ざれど、専門家でない諸君に御話致さうと思ふのである、上人の居らるゝ處で斯ゝる事をお話するは當を得ざれど、専門家でない諸君に御話致さうと思ふのである、上人の佐渡へ御出になりしは文永八年で、御歸倉になりしが同じく文永十一年である、紀元で申せば紀元一千九百三十一年に、お出になり、御歸倉なされしは千九百三十四年、御年五十歳に御渡りになつて御歸りが五十三歳である、即在島年月は三ヶ年である、之を正確に數へますれば、二ヶ年三ヶ月、即ち日數にすれば約八百五

六十日である、至急でありし故委しく取調べなかつたが、月を申すならば文永八年十月の流罪で同十一年二月御歸倉なされたのである、上人の御生涯の長さに比すれば在島の年月は短日月であるが、其間に起りし所の事項は甚だ重大なる事と考へ、龍ノ口の法難は九月十二日、翌日越智を去て佐渡に向はれ、而して相模より寺泊迄十二日間を費やし、寺泊に七日間滞在して居られた、此の七日間の事は大事なる事故後に述べる事にしよう、同年七月寺泊を出發して二十八日極ヶ崎へ到着し、櫛の木の根元に腰をお掛けなされたのである、塙原に居られしは文永九年四月七日迄約五ヶ月餘りである、四月七日より一ノ谷に御出になりしと曰ふる事私の見聞した上にて考ふるに、上人は一ノ谷にのみ居りしにもあらず又塙原のみに居られしにもあらず、彼處此處に始終御出になりしと思はる、日朗上人が後世稱する日朗坂より遙に庵室に居らるゝ御師範を御呼びなされたと云ふが、いくら庵室の方向に面して大聲を發するも聞ゆる筈なし、其の距離は餘り遠う過ぐる故

聞えなかつたであろうと思はれる、塚原であるならば距離が近き故聞えたかも知れない、此に依て考へて見ると、塚原に上人は多く出になつた事と考へられる然し何れが真なるや判然致しませぬ、而して上人が御教面の後の出發は、文永十一年三月十四日か十五日か確には判らない、文永九年七月より十一年七月迄約二ヶ年一ノ谷に居られしと曰ふ事である、其から柏崎に行かれたのが十一月と曰ふ、是等は只年月のみをいひ並べて面白くあらねど一應歴史を見るに宜しからん、又舟待ちせられし事も其の當時を追憶すれば、古への不便なりし事は追想するに餘りある事である、即文永八年上人五十歳の時、寺泊にて二十一日より二十七日に至る迄、海上不穩の爲め舟待ちせられし此間、上人の胸中の如何計りなりしかは察するに餘りある事である、當時上人は活動の連續にてありしが、之の舟等待されし一週間は多少の寸暇ありし事と思はる、吾人は同様平凡の人々は半日位の時間を待つ事すら退屈するのである、上人は之の七日間に於て色々の事を御考へ

れし時は寺泊にて七日間舟待せし時の二日目である、即一日滞在して後、心の平靜なる時に於て認められたる者である、又其の巻尾には『日蓮は八十萬億那由陀の菩薩の代官なり』との玉ひし、此の點は上人の自覺を表はされし時ならんと思はる、此の意味よりして寺泊御書は大事なる御書と思はる、上人はあらゆる災難に値ひたれど未だ天災の難に値ひし事がなかつた、即人爲的迫害は受けたが天災に値はない、幸ひ寺泊にて七日間舟待せし事は天の迫害に値ひし事である、上人は之の迫害にも克ち得たのである、

上人は其より順次松ヶ崎に到り塚原の三味堂に投せられたのである、其處は死人の屍を投する所である、斯ゝる所に配せられたるは即世間の人に捨てられしと同様である、爰に於ても上人は又人爲的の迫害及び天災に克ち得たのである、塚原に居りて富木殿に御遣しなされし御遺文がある、即遺文(七百二頁)『去る十月十日に附けられ候ひし入道寺泊より還し候ひし時法門を書き遣し候ひき推量候らん既に眼前なり佛滅後二千

なされしと思ふ、又其已前に於ても、上人は法華經を色讀せられ隨力弘通に就いて確信を懷かれて居つたのである、大法弘通に就いて責任を自覺せられし事と思はる、其は尤も法華經の經文に適合せる事實を作り、此の經を弘むる者は種々の迫害に値ふと經文に示されしは、法華經中の文の如く迫害に逢ふに至りて彌々弘通に就いて自身位適中せる者はなからんと思召されしは、法華經中の文の如く迫害に逢ふに至りて彌々弘通に就いて自身位適中せる者はなからんと思召されしならん、他に向て弘通する上に於ては如何なる迫害に當ても、諸天善神の加護に依りて此の地點まで來りし事を御考なされし時は嘸かし悦しき事でありしと思はる、之の邊よりして上行の再誕は彌々自身に適中せらる事を御考なされし時は嘸かし悦しき事でありしと思はる、斯の如き御言葉が(遺文、六九六頁)ある曰く「本より存知の上なり始て歎く可きにあらざれば之を止む云々」、斯の如き御言葉は單純なる様に思はるれど、其の意味は甚だ深いのであると思ふ、而も之をお書きなさ二百餘年に月氏漢土日本一闇浮提の内に天親龍樹内鑑冷然外適時宜云々天台傳教は粗之を盡し玉へども之を弘め残せる大事の祕法を此國に始て之を弘む日蓮豈人に非らずや云々」之の御文は在島中始て著されし御誠意である、考に考を重ねて一層自覺が強まりしと思はるゝのであります、上人の御在島中に於ける出来事は多い、即阿佛坊遠藤爲則是は上人の信者たるのみならず、人間として彼は模範とすべき者である、即勤王の志深く又妻の千日尼も同じく念佛に執着して居りしとは曰へ彼等は上人の出島になるや否や、上人に迫害を加へんとしたのである、其の譯は上人が念佛無間と折伏したからである、彼は其を意恨に上人を殺害しようとして行つたのである、而し彼は直に刃を出さずして今一應上人に向て宗義の如何を確めんとせしは、大に武士として又人間として模範である、凡て人間は之の精神が各自に懷かれたき事を望むのである、今現に阿佛房の墓は餘り立派なるものではないが、阿佛房の寺の後方にある、阿佛房の事は日蓮上人に對して世間

の修身談として誇るに足るものである、

此と同じく最蓮房は中々學者即ち學德兼備の人である、之の人が上人の教に感して歸伏したのである、上人は此處に於て信心強盛なる外護の權越を得て大に心に喜悅を生ぜられしと思はる、阿佛房の様な人間最蓮房の様な人間に歸依せられしは、内地と異り斯ゝる所に御住ひなされし故、弘通の點に於ても如何にも心地よく御思召したであらう、吾人は普通に生活を爲し居る故其れ已上の事は判じ兼ねるが、實際に自身が斯様に迫害に値はない故人の有りがたさを具に感する事が出來ない、上人は非常なる迫害に値みて後斯ゝる信者を得し事故其の喜は大なるものであつた事と拜察する、

文永九年には有名なる塙原問答あり、其年二月吾人の肺肝に銘する所の開目抄を御製作になつたのである之の抄は信者にあらずとも一般に讀む事を要す、即學說の點に於ても感情の點に於ても終始上人の心血を注ぎて御著しに成つたのである、之の時は感情の絶頂に

私等の考に依れば、紙が乏しければ文字も少しく書くが普通である、上人は紙類に乏しき佐渡に於て斯ゝる大なる文字を書かれしを私は非常に愉快に思ふ、上人の御氣象の一班を伺ひ奉る事が出来ると思ふ、其から今一は矢張佐渡御書の續きに鎌倉の弟子旦那に送られし御消息文中に「外典書の貞觀政要すべて外典の物語八宗の相傳等此等がなくしては消息もかゝれ候はぬにかまへてかまへて給候べし云々」即佐島流罪中、殊に身に迫害を受けながら外典の物語八宗の相傳等を取寄せて消息文を作らんとせられし其の態度其の心根を伺ひ察するに於ては、其の苦間に於て而も餘祐縛々としてあらせられしに至ては、如何にも其處に一大自覺の確立せらしを思ひ起すのである、即上行の再誕として大に感すべき事である、此れに依て貞觀政要を見まするに中々の意味あるのである、

始め虚空藏菩薩に祈りて血を吐きしより一貫して考ふるに、幽言微妙にして何等語を發するの余地がない、

至りし時であると思ふ、凡ての事が頭の中に集りしは此の時でありしと思はる、之の抄は解らぬと曰ふも五十遍乃至百遍讀むも宜からん、從て此の抄御著作後認められし佐渡御書を讀めば、讀む程心の動かさる實に立派なるものである、今佐渡御書の全文を拜讀致さうと思ひましたが、餘り長くありますから文中の一節を拜讀しますれば(遺文八三〇)「何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ旃陀羅が家より出たり、心こそ少し法華經を信じたる様なれども身は人身に似て畜身なり、魚鳥を混丸して赤白二諦とせり其の中に諸神を宿す濁水に月のうつれるが如し糞囊に金をつゝめるなるべし心は法華經を信する故に梵天帝尺をも猶恐しと思はず身は畜生の身なり色心不相應の故に愚者のあなづる道理なり云々」以上の如く文々句々皆其の精神の不動たる所を見らる、私が佐渡御書に就て特に感せしは佐渡の國には紙なしと云ふ、定めし紙に附いて御不便でありし事と思はる、而るに其の御真筆を拜見するに紙乏しきにも拘らず大きい文字をお書きに成て居る、

た、之も門下の者は一讀を要するのである、此の開目抄及び本尊抄の二抄の内容は吾々素人に直に判断せられざれども、一應私の考通りを申すならば、開目抄は意義壯快にして血の溢るゝ計りである、而し本尊抄は至極平易である、即開目抄御著作の當時は御精神の非常に興奮し居られし時であり、又本尊抄の時は稍順境の時代なりし故ならんと思ふのであります、

四月二十五日に本尊抄御製作に相成り、七月八日本尊を樹立せられた、是は凡ての人の信する所であるが佐渡根本寺にある本尊を拜見しますると四月八日となつて居る、而して此の本尊が上人の御直筆なるや否やは疑問である、が後生の疑作とも思はれぬ、兎に角研究に價あるものと思はる、

若し其を真とすれば本尊抄を拜讀する時に於て、眞たる如く見れば見ゆるのである、即本尊抄に「其本尊の體たらく」云々に依て略ぼ其の真意を判断が出来るが前にも述べし如く法華經の行者には迫害あり其と同時に又佛天の加護ありと曰ひし自覺は、如何にしても

上行の再誕なる事を知るに足るのである、法華經の行為に加護あるならば他の一同にも左あるべし、即如説修行抄に『天下萬民諸乘一佛乘と成て妙法獨り繁昌せんと時萬民一同に南無妙法華經と唱へ奉らば吹く風枝をならさず兩壤を碎かず代は義農の世となりて今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得人法其に不老不死の理顯れん時を御覽せよ現世安穩の證文疑あるべからず』との玉へり、今鎌倉には災難續出されど其土即極樂なりと曰ふ自覺を懷き、之の偉大なる確信を以て御歸倉せられし事と思ふ、又其れなくば餘り面白からぬ問題である。普通の人間は目前の事のみを見て居る故に僻ヶ事も多くあるが、上人は自覺せられた上に於てなされし事故左様な事はないのである

上人の赦免になりしは二月十四日である三月七日には又々海上不穏の爲め、オギの港に吹き寄せられ、十四日に御出發に成たのである、三月十二日遠藤左衛門尉に遣されし御文に(一〇三五頁)曰く『天の諸の童子を以て給仕となし刀杖も加へず毒も害する事能はずと云

は已前より御考へなされて居りし事にして、強ち北條家を諫めて用ひられざる故に身を退く杯は上人としてあり得べからざる事である、

次に上人は鎌倉に御出の時よりは、佐渡に居られし八百五十日計りの方が意と情とに合して發展せられた時である、何れにしても佐渡中に於ける御誠意は察するに餘りある事である、即文中日蓮は日本第一の富者なりと曰ふ、斯の如き世に上人を苦しめしは其の當時の世人が馬鹿者揃でありし事は勿論であるが、又上人は慈悲あり勇氣あり又一大自覺ありし故に此を通過したのである、近代に於て其の跡を紹繼する様な偉人を見たいと思ふが、中々見當らない、

私は彼地を巡拜して而る後御遺文を拜讀すれば、亦一層深く其意味を了解する事が出来るであろうと信じて喜んで居るのであります、

話は至極不束であります、却て話をさせて貰て自分が深く感じたと云ふ始末であります、却て諸君には御判り悪い事が澤山あつたであります、其の點に



附いては深く參堂なされし御一同に感謝致す次第であります、私は之れで御免を蒙ります、(完)

へば有難き御經なる哉而れば左衛門尉は梵天帝尺の御便にてましますが靈山の契約に此の判を參らせ候一流は未來へ持たせ候へ靈山に於て日蓮日達と呼び玉へ其時御迎ひに罷り出づべく候尙又鎌倉より申し進すべく候也』と仰せられたのである、私は勝手がましい様であるが、上人は在島中より身延穩栖の御意ありしと察す、餘り委しく駄言を吐いて専門家の叱責を受くるが、私は叱りを受けた覺悟で居りますから思ふ存分お話する次第であります、支那にては先生から三度教へを受けると曰ふ、而して三度び教へて聞かされば辭職すると云ふが、其は大に一笑に附する債がある、之れは支那に於ける思想であるが、上人は反對に三度諫て用ひられなかつたから其儘化を止めて身延へ穩栖したと曰ふ譯ではない、其の已前より其の志がありし事と思ふ、法華經に顯れたる豫言悉く自身に當てはまれり、只是れより後の事は静に今迄の仕事は終りし故、是れより根拵ひ即基礎の確立を計つたのである事と思はる、即此の穩栖の御思召

## 折伏餘論(二)

白碧生

△日蓮主義は旭日昇天の勢を以て勃興し、天下の識者競ふて研鑽に志し、いまや醇乎たる信仰を把住するもの其多さを加ふるに到れるは、上人の大理想が時代の進運を啓發し缺陷を補整するに適切なるを證する、而して此大德教の力は發動して必ず國と人との靈化すべきこと疑へない、上人が『此國に弘まるべし』と云ひ、『一向本門の直機なり』と仰せられたる教義は、吾人が壯快の念にうたれて事實的に心讀し色讀することを得る、故に日蓮主義者の志士が、孟聖の「天下の廣居にて天下の大道を行ふ」の見地に立ち、正々堂々相結んで異體同心の聖訓を色讀するものあらば、大德教の建設流布容易にして天下人心の歸向點を示すことが出来る、今正に大活躍の時である此好機を逸してはならぬ然れども悲哉、今尚ほ信仰の大義を謬りて迷妄の凡情に陥れる教徒の多きは、日蓮主義者としての資格を

缺いて居るのは勿論であるが、それ等によりて日蓮主義の歸趣を謬らしむるものがある、都における日宗各教團、吾人の調査する所によれば、我同志の二三をのぞいて他に正義の活動として觀るべきものなく、漫りに病的意義を含める文字を上人に冠らして一己利養の爲に上人を賣るものがある、信仰對象の現在爲體は正しく逆路伽耶陀の大罪であつて、即ち『何かなる乞食にはなるとも法華經にきずをつけ給ふべからず』との嚴訓に照し、何等情狀酌量の餘地なく、大に呵責誘法の矢を放つて彼等の胸を突き通ふし息の根を止めねばならぬ、上人が我弟子等と云ひ法華經の如くと云ひ、さらに特に心みよとの嚴示教則を與へられたのは徒ら事ではない、日蓮の弟子等は眷々匪躬の節義を持し、大法發揚のために身命も惜まざる活動を行はなければならぬ、

## 活動史

爲に努められつゝありと云ふ

## 房總教報

△二十九日午後二時講演開會此日月末なりし故聽衆少なかりしも皆熱心なる求道者ののみ申川事類君は人格修養上の日蓮主義の適切なる所以を論じ野口僧正道の大切なる理義より説き起して古聖賢の道と日蓮主義との對照し大なる道は日蓮主義なりと結び本多大僧正は死生観より宗教信仰に進み日蓮主義より死生の觀念を述べ永久實在不滅の真意義を論じて佛陀弘大的願行に及び人は必ず天下の大道に來るべしと日蓮主義の研鑽を獎め教會時合掌

△十月六日午後二時第一義會を開催し三上記者は國民修養の典型に就て酒々一時間餘の懇親を振ひ井村大學林教授は木畫二像の本尊に就て古來より誤れる思想あるを評論して實在人格の意義を明かにし本多大僧正は極味と法悦なる題下に聖羅身延生活の聖き狀態を說き宗教信仰に生活するものは清新なる趣味と喜びに充ちるを得べき所以に就て實例を擧げて聲益を布かれれば聽衆は何れも感動せざるものはないなりき

△思恩林十月五日午後七時淺草永住町妙経院にて開會同會は月を逐ふて會員を増し基礎漸く固く野口僧正主幹として教訓的講話試み漸次盛會に向ひつゝありと云ふ△思恩林十月五日午後九時教會入りき△九月十四日午後六時より明治天皇達拜追悼式を行ふ參拜者堂に溢る本多大僧正二十餘名の僧員が率へ嚴肅莊重の儀式を以て自受法樂の禱り式後國民の自覺用意に關して日蓮主義の卓越せる方圓を說き未聞の聽者をして信仰に導くものありて其功果著しきものありき△淺草山谷所在の國明寺親善會は何れも家庭を詰ひ個人を説き講演會を開き大にこの道の

△九月十五日午後二時より統一閣にて講演會を開き信解妙益の法要を贊修し石川顯隆師は本尊と信仰と願して信仰の對象に就て各宗教の本尊を論評して統一主義の意義を明かにし野口僧正は赤子なる題の下に陛下忠貞の國民は明治天皇の大業を翼賛して國運發展の爲に努力すべきを説くへ本多大僧正は大哉日蓮主義の講題によりて人身觀宇宙觀佛陀觀の各方面を識き絶對完備の大主義は日蓮主義なる所以を詳述して歸趣に迷へる聽衆に對して人生の旨致を會得せしめ法益多かりしをな受けたりき△天曉會御會講演は二十一日午後四時より帝國大學御殿に開く始崎博士八代海軍中將の感話によりて一種の感想を與へ稻田海素師は京都に於ける眞蹟探討の實況を語り多數の眞蹟寫眞版を参考に供して各本山所藏の眞蹟を紹介せられ就中經一丸授與の本尊は墨模済筆勢娟潭にして來聽く何れも無限の感にうたれ一段教慕欽仰の念を強ひしむるものありたり

△九月二十一日午後三時大總蓮照寺に講演會を開き吉永義彦師と山権會長の講話あり△九月二十一日午後三時大總蓮照寺に講演會を開く七里法華の教田莊難さりと稱するも聽衆はこの妙益に活はんとして參集するもの約百名井口布教師開會を宣し稻田詩翁布教師は日蓮主義の信仰を聞くして圓滿なる生活を作らるべきを教へ三上本講記者は方と題して物質の力を説き精神文明を語り日蓮主義の信仰の大道を論じ此の大道は特に七里法華に活躍して他を教化したるものなれば今更に一同の奮起を求むと云ふ激勵を與へて六時半教會を告ぐ



大僧正旭日苗師監修

古今  
大家  
說教演說集第一輯

代價送料共  
金一圓八錢

久しく品切れの本書第一輯四版は製本出來せり  
同第二輯より第四輯に至る殘本あり品切れとならぬ内  
御購求あらんことを

東京芝區二本榎一丁目三十八番地

發行所

妙  
教

社

改名日堂

笹川真應

隨

東京府品川本光寺

謹告

各地方より御通信或は編輯及事務上に關する事は總て  
小字宛御發信相顧度右に關し他同人へ御發信相成候時  
は御返信の時間少々相遅れ候様に相成申すべく候間此  
儀豫め御承知置願度敢て謹告候也

統一編輯部

三上白碧

會津妙

法寺

虔告

聖日什上人の靈蹟地たる妙法寺本堂は今回新築工事成  
り来る廿七日より三日間開堂式を舉行候間御參詣有之  
度此段謹告候也

今回頭書の通改名候間道俗諸賢へ謹告候也

號貳百拾參號

明治三十一年二月二十四日第三種郵便物認可(毎月一回)

(東京 三説印頃株式會社印刷)

桃山奉送の記

文學博士 姉崎 正治

氣質と宗教

マスター、アーヴ 柴田 一能

觀心本尊抄綱要

大僧正本多日生

釋尊と當時の世界

帝大法科生 松浦道嘉

折伏餘論。活動史

統一